

## 〈行う〉ということ：ヴィトゲンシュタインの意志論

広川，明

<https://doi.org/10.15017/1398594>

---

出版情報：哲学論文集．29，pp.59-74，1993-09-24．九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

# △行なう▽ということ

—— ヴイトゲンシュタインの意志論 ——

広川 明

## はじめに

われわれのなす行為は、その外側に立って眺めてみるならば、世界に生じてくる他の出来事と何らちがいがあるわけではない。私がイスにすわっていること、本を読むこと、文字を書くこと、書いた原稿をいきなり破ること……。これらはある一定の場所である時刻に生じてくる状態（過程）、あるいはその変化であり、そのかぎりでは「出来事」という呼名で一括してもさしつかえないであろう。

その意味では、行為が世界の出来事の連鎖のなかに位置づけられることは明らかである。だが、そうであるとすれば、私と私のなす行為もまた出来事の連鎖の一部に吸収されてしまうかに見える。行為がたんに「生じてくること」とみなされたときに、私が△すること▽行なうこと▽ということ行為の本来の意味も同時に蒸発してしまうかに見えるのである。いわゆる

<行なう>ということ

決定論が自由意志の存立を危うくするのも、こうした見方を極限まで進めていった一つの必然的帰結であろう。

「すること」「行なうこと」としての行為の意味はいかにして捉えられるであろうか。それは、行為をなしている本人であるこの私が、いかなる仕方で自己の行為と関わっているかを探ることによって語られるべきものだと思う。本稿では、このような視点から、行為の本来のあり方に接近してみたい。

## 一 外的観点から見た行為

冒頭で示した行為の描写は、「外的観点」からなされたものと言うことができよう。行為は、「私」の個人的な観点を離れ、出来事の連関のなかに位置づけられ、生じてくることの一つとして捉えられているからである。たしかに、このような描写を徹底してゆくことは、包括的に世界を理解するための必然的道のりであろう。「私」を中心としてそこから世界を描写するがぎり、それは私から見た世界像にすぎない。より十分な世界像を手に入れるためには、私は一步退いて、私自身をも世界の一部と見て、そこから世界全体を眺めなければならぬ。世界は、いわば、「中心のない世界」でなければならないのである。<sup>(1)</sup>これは別に想像困難、というわけではないだろう。われわれのもっている常識的な世界観がじつさいそのようなものであるし、自然科学が描く物理的世界とは、それをより精緻に仕上げたものにほかならないからである。そして、考えられるもつとも容易な道とは、行為を物理的状态や過程に還元し、自然現象と同じように扱うことである。

たとえばライルは、伝統的な二元論を徹底的に批判した人であるが、彼によれば、「心」を「物体」とは異なるカテゴリーに属する存在者と考えることは、心の概念についての根本的な誤解である。意志についても、それを心的な存在者と考えるべきではない。意志についての言明は公共的に観察可能な行動のパタンについての言明に置きかえられねばならないのである。しかしながら、その後、ライル流の行動主義にはさまざまな難点が指摘されるようになった。そうすると、それを回避

する方法として、今度は「心脳同一説」が提案された。これによれば、「大脳と意志」の関係は、「放電と稲妻」「分子運動と熱」などと同じように、同一性の関係なのである。したがって、意志は、大脳の状態（過程）へと還元されなければならないことになろう。

歴史的に言えば、こうした意志や行為の捉え方はデカルト哲学に端を発する。デカルトが方法的懐疑によって「思惟する私」を世界の連関からくり出してきたとき、この「私」はもはや特定の場所に存在する個人のことではなくて、世界の外側に立ち、そこから世界全体を眺望する「超越的主体」であった。他方、この主体によって、人間の身体を含めた世界のいっさいのものが客観化され、対象化される。認識の主体としての「私」と、この主体の対象である世界（物体）は独立の実体として措定され、二元論の枠組は動かぬものとなった。このような二元論的思考法は、さまざまな変容を受けながらも現代まで受け継がれていると言つてよいだろう。

こうした外的観点から捉えられるかぎり、意志も行為も他の事物と同じように「私」の対象である。行動主義においては、意志は、外側から描写した行動のパタンによつて置きかえられ、また、同一説においては、意志とは、あらかじめ成立している大脳の「状態」や「過程」なのである。いずれの説も、外側から描写して写しとることによつて、意志について知ることができると考えているという点では同じである。その意味では、二つの説は、外見上のちがいにしかかわらず、同じ前提の下に立つものと言えよう。

しかしながら、そのように行為を外側から見ているかぎり、 $\wedge$ すること $\vee$ 行なうこと $\vee$ としての行為の意味を捉えることはできないと思われる。以下の論述においては、行為をなしているこの「私」が、行為の源泉としての自己自身をどのよう捉えているかという問題をゆく。そのような「内的観点」から見ることによつて、行為の本来のあり方も見えてくるであろう。そしてこれは、(1)意志があらかじめ成立している大脳状態や行動のパタンではないとしたら、いかなるしかたで意志（そして行為）の成立を語りうるのか、(2)その場合、行為者としての「私」は行為といかなる関係にあるか、

という二つの間に焦点を結ぶと言つてよいであろう。とりわけ(1)については、言語の役割についての考察が不可欠なものとなるはずである。以下で、ヴァイトゲンシュタインの意志論を振り返りながらこれらの問題を考えてゆきたい。

## 二 『論考』における意志論

デカルトにおいては、世界全体を「対象」とする「思惟する私」が哲学の第一の原理として立てられたが、これは、カントの場合では、「経験に先立ち、経験を可能にする」根拠としての「超越論的主観」として受け継がれていった。こうした近代哲学の歩みにおいて、△主観—客観▽という思考の枠組が定まっていたと見ることができようが、ヴァイトゲンシュタインの『論理哲学論考』(以下『論考』と略す)<sup>(1)</sup>は、まさしくこのような近代哲学の枠組を具現したものと言うことができる。たとえば『論考』で、ヴァイトゲンシュタインは、主体と世界の関係について次のように述べている。

「もし私が『私が見出した世界』という本を書くとしたら、そこでは私の身体についても報告がなされ、またどの部分  
が私の意志に従い、どの部分が従わないか、などが語られなければならないだろう。すなわちこれが主体を孤立させる  
方法であり、むしろある重要な意味で主体が存在しないことを示す方法なのである。というのも、この本では主体だけ  
が論じることのできないものとなるであろうからである。」(五・六三二)

この引用に現れる「主体」を、ヴァイトゲンシュタインは「形而上学的主体」(『論考』五・六三三)と呼んだが、この主体と世界の関係が、ヴァイトゲンシュタインの意志論の根底にある、と言つてよいだろう。

『論考』では、有名な二つの意志の区別がなされるが、これは『論考』における主体と世界の関係からの帰結である。ヴァイトゲンシュタインは、意志を「現象としての意志」と「倫理的なものの担い手としての意志」に分け、このうち、前者は「心理学の関心を引くにすぎず」、また後者については「語ることができず」(『論考』六・四二三)と言う。なぜ、それぞ

れに対して否定的なコメントがつけられることになったのだろうか。

初めに、「現象としての意志」の方に目を向けることとしよう。それが、「心理学の関心を引くにすぎない」のはなぜか。「現象」という言葉は、この場合、「私が見出した世界」に生じてくる偶然的なことから意味しており、「出来事」とほぼ同じ意味と解することができよう。私の身体の「どの部分が私の意志に従い、どの部分が従わないか」と言われるときの、身体の運動を生み出す意志は、この意味での「現象」である。このような意味で、意志が「現象」であるなら、それは他の出来事（たとえば、物体の落下や、気温の上昇など）と同じような条件に制約されざるをえないことになる。

「たとえ、すべてがわれわれの望むとおりに生じるとしても、それはいうなれば、運命の恵にすぎない。意志と世界のあいだにはそのことを保証するような論理的連関が存在しないからである。そして、物理的な連関が想定されるとしても、この連関自身を欲することはやはり不可能だからである。」（『論考』六・三七四）

意志と行為の関係が、偶然的な関係であるとすれば、私の意志が私の望むままの結果をもたらしてくれるか否かは、一つの現象が他の現象をもたらす場合と同じように私の手を離れて世界の側に依存せざるをえない。だとすれば、意志することはむだであろう。それゆえヴィトゲンシュタインは、当時の覚え書き（『草稿』一九一四～一九一六、以下では、『草稿』と略す）に「世界の出来事を私の意志によって左右するのは不可能であり、私は完全に無力である」と書いたのである（『草稿』一九一六年六月十一日）。これは、「世界は私の意志から独立している」（『論考』六・三七三）ということでもある。逆説的に言えば、「私は出来事への影響をもっぱら断念することによって、自分を世界から独立させることができ、したがって世界をある意味で支配しうる」（『草稿』一九一六年六月十一日）こととなる。

私の意志がこのような意味で「現象」であるなら、意志することそれ自体を善とか悪とか言うことも無意味である。「世界のなかでは、すべてが生じるままに生じ」（『論考』六・四一）、そして「あることが岩石から生じようと、私の肉体から生じようと、生じることは善でも悪でもない」（『草稿』一九一六年十月十二日）のである以上、個々の行為を生み出している意

志自体も善でも悪でもないはずだからである。このような意味で、「現象としての意志」は心理学的興味を引くものでしかない。したがって、「倫理的なもの担い手」になりうるのは、個々の具体的行為を生み出す方の意志ではないことになる。

「善なる意志、または邪悪なる意志が世界を変えるならば、その意志は世界の限界を変えるのであって、事実、すなわち言語によって表現されうることを変えることはできないのである。

つまり、この場合世界はこれによって総じて別の世界になるのでなければならぬ。世界はいわば全体として縮小もしくは増大せねばならない。

幸福な人の世界は不幸な人の世界とは別の世界である。」（『論考』六・四三）

このように語られる場合の意志が「倫理的なもの担い手としての意志」（以下では「倫理的意志」と略す）である。これは、「私の身体などの部分が私に従い、どの部分が従わないか」と言われるさいの具体的行為に関与する意志ではなく、「世界の限界」を変えうるのみで、「事実」を変えることのできないものであり、「超越論的意志」と呼ぶこともできよう。一九一六年六月十一日の日付の覚え書きで彼は、「意志とは世界に対する態度決定である」とも記している。「倫理的意志」とは、このような意味で、「私の見出した世界」に属さず、したがってそれについて「語ることはできない」。「命題は高貴なものを表現しえない」（『論考』六・四二）と語ったヴァイトゲンシュタインは、倫理的なものを担うべき意志を、語られうる事実の一部と考えることは決してできなかったのである。

では、この意志は、いかにして善悪を担いうるのであろうか。一九一六年七月二十一日の日付で、ヴァイトゲンシュタインは、「自分の肢体を使うことができず、したがって日常の意味では、自分の意志を働かせることができない人間」を思い浮かべるよう促している。ただし、「彼は考えることも、願望することも、他人に自分の思想を伝えることもでき、したがってまた、他人を通して善いことや悪いことをなしうる」という仮定も付け加えられている。ヴァイトゲンシュタインは、「この場合明らかに、倫理学は彼に対しても妥当し、彼は倫理的な意味で意志の担い手である」と言う。

しかしながら、この引用に従えば、彼に対して「倫理学が妥当する」ためには、彼は具体的な善いことや悪いことを（他人を通して）行ないうるのではなくてはならないということなる。たとえばもし、彼がそばにいる人に言葉で自分の考えを伝え、何か悪いこと（善いこと）をするように命令するならば、この伝達は口を動かして音声で伝えるという身体の動きを含むと思われる（目の動きで自分の考えを伝える場合にも、身体の動きを含むと言えよう）。そうだとすれば、その人に倫理学が妥当するための条件として、「日常的な意味」での意志、すなわち「現象としての意志」を再び導入することになる<sup>(5)</sup>。そしてこのことは、「倫理的意志」という考えを、実質的に骨抜きにするものと思われるのである。

以下の論述でわれわれは、具体的行為に關与する方の意志に的を絞りたい。さしあたっては、『論考』の意志論ついて次のような点から見なおしてみよう。まず第一に、意志が出来事と同じ身分に置かれているという点。そして第二に、第一の点から、重大な帰結が出てくると思われる。意志が出来事であるとするならば、自分の意志と未来の行為の關係も、出来事あいだの關係と同じはずである。ところで、ヴェイトゲンシュタインは、現在の出来事から未来の出来事を予測するような推論は成立しないと主張する。なぜなら、そのような推論を正当化しようような因果連鎖は存在しないからである（『論考』五・一三六二）。したがってまた、「意志の自由は、未来の行為をいま知ることができないという点に存する」ということにもなる（『論考』五・一三六二）。意志を「現象」として行為から切り離して考えるかぎり、これは避けたい帰結である。このことから考えて、第三に、「世界の限界」であり、この世界に属さない「意志する主体」（『草稿』一九一六年十一月四日）という觀念と『論考』の言語觀との関わりをもう一度洗いなおしてみる必要があるだろう。

### 三 言語ゲームと行為

ここで指摘した三つの問題点は、最終的には一つの根源的理由にいきあたる。それは、『論考』の根本思想であった「写像



理論」、すなわち、言語を事実を写すものと捉える言語観にあつたとと言えるだろう。『論考』においては、言語の全体は真偽のきまる文、つまり命題の集まりのことである。そしてそれぞれの命題を論理的に分析してゆくならば、結局はそれ以上は分析できない最小単位、すなわち、「要素命題」にいきつく。要素命題以外のあらゆる命題は、このような論理的原子としての要素命題から論理的に構成されている。命題の意味は要素命題の関数なのである（真理関数の理論）。

では、最小単位である要素命題の意味はどのようにして与えられるのか。そこで登場してくるのが、言語を、現実を写す「写像」として捉える「写像理論」である。ヴァイトゲンシュタインによれば、要素命題は、一定の記号の配列によって言語外の事態を写し出しているのであり、どのようなときに真であり、どのようなときに偽であるか知ることによってその意味は理解されるのである。このように『論考』においては、最終的には事態と要素命題の写像関係において言語は成り立つのであり、「写す」ということが言語のただ一つの機能であると考えられていた。

しかしながらヴァイトゲンシュタインは、『論考』出版後十年たらずで、『論考』の言語観に疑いを抱くようになった。この疑いは、その後、命題の意味を現実との写像の関係によって保証できるのか、という『論考』の言語観を根底からゆるがす疑いに発展し、そこから言語ゲームの思想が胚胎していったのである。『哲学探究』（以下『探究』と略記する）の序文では、「旧著のなかで書いたことのうちに重大な誤りがある」ことが認められているが、これは旧著との対決を表明したものと受けとることができる。

『論考』においては、事実を写すことが言語のただ一つの機能とされたが、『探究』では、命令、嘆願、感謝、警告、挨拶、祈り：などのさまざまな言語活動に目が向けられるようになってくる。「言語ゲーム」という表現は、言葉を使うということ、が、われわれの行為あるいは生活形式の一部であることを明らかにするためのものなのであり（『探究』第一部二十三節）、このような「固い岩盤」の上にわれわれの日常生活も成り立っている。言語ゲームの多様性のうちに、われわれの生の多様性を見て取ることができるだろう。そうであれば、「写す」ということも言語の機能の一部にすぎないのであって、それが言

語のただ一つの機能であると言うことはできない。そして言葉の意味についても、言語外の事実との関係という観点から考察されるのではなく、われわれが言葉をどのように使っているか、という観点から考察されるようになった。「ある言葉の意味とは、言語におけるその言葉の用法である」(『探究』第一部四十三節)というのが、『探究』の意味論の核心である。

このように、言語ゲームという新しい言語観を手にしたヴィトゲンシュタインは、「写像理論」と決別していった。それに伴い、意志(そして行為)についての見方もまた異なるものとなった。言語が、「写すもの」としてではなく言語ゲームとして語られるようになるとともに、意志についてもいまや内的観点から語られることとなったのである。

前節で示した第一の問題、すなわち、「出来事としての意志」という問題から始めよう。『論考』においては、意志は「現象」とみなされていたが、『探究』では、「意志的に行為が行われるさいの意志は、行為に付随しているVのではない」(『探究』第一部四三三節)という点が強調され、「作用」(状態・過程)としての意志という考えが徹底的に批判されていた。

次のような例を見てみよう。たとえば、ながらく迷った末に歯医者に行くことに決めたり、これから仕事を始めようという場合、われわれは行為に先行する意志の作用のようなものを想定したくなる。しかし、出迎えにきてくれた人がさし出した手を握る、手紙を書くために手を動かす、話をするために口を動かす……といった例を考えるとどうか。こうした事例すべてに、それに先行する意志の作用を同定することはほとんど不可能であろう。人は一つの事例に基づいて、すべての場合を論じつくそうとしがちである。しかしながら、「意志行為と非意志行為のあいだには、意志の作用 (act of volition) なる一つの要素の有無が、すべての場合に共通するちがいがいとしてあるわけではない」のである(『茶色本』二四三頁<sup>(9)</sup>)。

一般的に言って、意志の作用によって行為を説明しようとする説では、意志の概念を行為の概念に優先させて考えている。意志によって行為は生み出されるのだから、生じてきた行為のほうは後回しにして考えればよい、というわけである。これは、心身二元論にしばられた考え方であって、多くの行為論の背後にある前提であろう。しかしながら、行為こそ第一に考察すべきものであって、意志はそこにおいて説明されるべきものである。

『意志することは、もし一種の願望でないはずだとしたら、行為そのものでなくてはならない。』それは行為の前に立ちはだかつてはならない。もしそれが行為であるとしたら、それはその語の通常の意味でそうなのであり、したがって、話すこと、書くこと、行くこと、何かをもち上げること、何かを表象すること、である。ところがまた、話すこと、何かをもち上げること、何かを表象すること等を——志し、試み、努力することでもある。』（『探究』第一部六一五節）

意志行為であるか否かは、「多くの場合、ある内的経験によってではなく、その行為がなされる多種多様な状況によって特徴づけられる」（『茶色本』二五二頁）。すなわち、われわれの行なう個々の言語ゲームという脈絡において意志行為であるか否かは決まってくるのであって、そうであれば、「意志すること」を「行なうこと」から区別する必要もないということになる。

意志がこのようなものであるとすれば、「現象としての意志」と「倫理的意志」という、『論考』でなされた区別も不要である。意志はもはや、世界における出来事ではありえないし、かといって世界の中には存在しない「倫理的意志」が要請されることもない。意志することが行為すること自体であるとすれば、世界を越えた超越的存在をもち出す必要はないからである。意志の概念はいまや、世界の内と外に分裂することなく、行為の概念のなかにしっかりと結びつけられている。

#### 四 意志の言語表現

ヴィトゲンシュタインによれば、「ある状態の存立から、これとは異なった状態の存立を推論することはいかなるしかたによっても不可能」（『論考』五・一三五）であるが、それは、「そのような推論を正当化するような因果連鎖は存在しない」（『論考』五・一三六）からである。したがって、未来の出来事を現在の出来事から推論することはできないということになり、このことからの帰結として、「意志の自由は未来の行為をいま知ることができないという点に存する」ということにもなる。

『論考』五・一三六一。

『論考』では、意志は「現象」として、世界のなかで生じてくるもの一つとみなされる。そのような枠組においては、たしかに、自分がこれから行なうことを知っていることも、次に訪れてくる日食の日時を知ること、同じ帰納的な知りかたとして説明する以外にないであろう。

これに対し、『探究』においては、自分がこれから行なおうとすることは、帰納的な推論とはちがったしかなかたで知りうることが自覚されてくる。そしてこの知りかたのちがいは、言語ゲーム、すなわち生活形式のちがいとして説明されるのである。たとえば、ヴィトゲンシュタインは『探究』六二九節において、「命令」と「科学的」予測」という二つの言語ゲームを対比させて、そのちがいに注意を促している。その狙いは、「命令」も「予測」も、未来の事態についてなされるという点では同じであっても、言葉の働きは異なっているということを示すこと<sup>(1)</sup>にあった。

それと同じように、自分がこれからするつもり<sup>(2)</sup>の行為についての発言と、未来の事態を予測する発言とでは、言葉の働きはまったく異なっている。以下では、アンスコムが『インテンション』において示した考察を参考としながら、「予測」と「意志の表現」の文法的区別について考えてみることにしよう。

(1) 私はいま散薬を二つ服用するだろう

(2) そのあと半時間すると私は嘔吐するだろう

(1)(2)いずれも、その発言の後に生じてくることについて述べているという意味では異なるところはない。しかし、両者には根本的なちがいがある。まず、「私は散薬を二つ服用するだろう」の場合、私は、薬を服用するつもりだという決心・意志を告げているのであり、これは「未来の意志の表現」である。一方、「半時間すると私は嘔吐するだろう」は、いまの自分の体調や薬の効果などを考え合わせれば半時間後に嘔吐するであろう、という「予測」なのである。(1)が自分がこれから行なうつもり<sup>(1)</sup>の「行為」についての発言であるのに対し、(2)は自分の身に振りかかってくる「出来事」についての発言でしか

い。

(2)の発言については、「なぜそう思うのか？」と問われれば、私は自分の現在の体調や薬の効能などを根拠にして自分の発言を証拠づけることができる。これは科学的予測と同じであり、現在の雲の状態や気圧配置から次の日の天候を予測すると変わりはない。他方、「私は散薬を二つ服用するだろう」という発言に対し「なぜだ？」と問われ、「胃のもたれを治すためだ」とか「胃を洗浄するためだ」と答える場合、それは「予測」ではなく、私が薬を飲む「理由」なのである。私はたんなる傍観者・観察者としてそう言っているのではなく、行為者として「行為の理由」を与えているのである。

では、意志の表現は、自分の未来の行為とどのように関係しているのか。「私は半時間後に嘔吐するだろう」という予測は、もし私がじつさいには嘔吐しなかったなら、誤っていたことになる。その意味では、天気予報のような予測と同じように、世界の側の事実と一致するか否かによってその発言の真偽は決まってくる。他方、薬を飲むつもりだという意志の表現の場合、このことは成り立たない。自分がなすだろうと言ったことをなさない場合、私がまちがった判断をしたというわけではない。アンスコムが主張するように、この場合、未来の事態（行為）の方が発言に従うべきなのであってその逆ではない。ある場合には、事実のほうが言葉と一致しないがゆえに非難されるのであってその逆ではないのである。

## 五 観察に基づかない知識

しかしながら、そうは言っても、「くするだろう（するつもりだ）」という意志の表現については、それが写している当の事態が何かあるはずだ、という考えがどうしても浮かんでくる。そして、写されているのは意志の内的過程である、と考えるのは自然であろう。そうであれば、「私はいま散薬を二つ服用するであろう」という発言は、現在の自分の心の内部を同定した表現だということになる。しかし、その意志をもっている本人が、その発言によって自分の意志を写しているのだとし

たら、本人が自分の意志を誤つて同定する可能性もまた容認しなければならない。そしてこれは認めがたいことであろう。<sup>一四</sup>  
では意志の表現において、言語はどのような働きをしているのか。「私は散薬を二つ服用するだろう」は、心の内部を同定しているのではなく、そう語ることに初めて私の未来の行為の形が定まってくるのである。私の意志は、その表現を通してまだ存在しない行為へとすでに到達しており、そして私の行為がどんなものなのかは語りのなかであらわになっている。その意味では、意志の表現は「自己自身」に関することを外側へと表明し、自分の内側を明らかにすることなのである。次のようなヴィトゲンシュタインの言葉が、この事情を明らかにしてくれるであろう。

「なぜ私は彼に自分のしたことのほかにさらに意志をも伝達したいのか——その意志もまた、あのととき生じていた何かであつたからではない。あのととき起こつたことを越えて出ている私についての何事かを彼に伝達したいからなのである。」

自分のしたかつたことを述べるとき、私は自分の内部を開示している。——だがある自己観察に基づいてではなく、ある反応（人はこれを直観と呼ぶことができよう）を介してである」（『探究』第一部六五九節）

意志の表現は、観察に基づかない自己自身の表明であり、いまや内的観点から行為について語られるようになってくる。『論考』では、言語は事実の写像であつて、「私」は、言語が事実を正しく写していることを確かめることによって、事実のあり方について知る。自分の行為についても帰納的に知るしかないというのも、このような言語観に根ざした考えである。しかしながら、言語に現実の方を従わせることによって、現実を変えてゆくというのが行為の本来のあり方であろう。私が自己の行為について直観的な知をもちうるのも、このような言語と現実の関係の逆転において捉えられねばならないものである。『探究』第二部 X では、「私自身の言葉に対する私の態度は、他人の言葉に対する態度とはまったく異なっている」と述べられているが、そうだとすれば、ここから私自身の行為に対する私の関係が、それ以外のものに対する私の関係とはまったく異なるということも見て取ることができる。∧すること ∨∧行なうこと ∨としての行為の能動の意味とは、このような、「私」と「私の行為」の関係、すなわち、「行為者が行為の源泉としての自己についてもつ知において明らかにされるべき

ものであろう。

ワイトゲンシュタインの著作において散見できる、内的観点からの行為の考察をまとめて、「観察に基づかない知識」(knowledge without observation)として体系づけたのはアンスコムであった。それは、後期ワイトゲンシュタインの著作の綿密な検討から紡ぎ出されたものと考えられる。<sup>11)</sup>

「火星には二つの衛星がある」「中央アフリカは深刻な干ばつに見舞われている」「彼はタクシーを呼んでいる」……。これらの文はいずれも外部世界についての知識(彼の行為もそれに含めることができる)を述べているものであり、そのさい、それを確認するためには、観察の作業——じつと眺めたり触れたりする、器具を使って観測する、新聞で調べる、など——を通して事実を同定するという手続きが必要である。

これに対して、自分が何をしているのか、なぜそうしているのかと問われれば、私は即座に、「タクシーを呼んでいる」——「会議に遅れないようにするためだ」、「印鑑をさがしている」——「転出届を出すため」と答えることができる。すなわちわれわれは自分が何をしておりまた何のためにそうしているのかについて、観察の作業を伴わない直知をもっているのである。アンスコムは、この条件によって意志行為を規定しようとしたが、これは自分の身体の状態や位置についても観察なしに知ることができるという事実と深く結びついている。たとえば、「私はベッドに横になっている」「私は自分の腕を上げている」と目を閉じたまま言う場合、それは自分の身体の状態を同定してそう言っているのではない。われわれは、自己の身体の状態については、観察に基づくことなく直接に知っているのであり、それは、自分の行為が何であるか知っているというのと同じ意味で言われているのである。

世に住む身である以上、「私」は、「身体」をもち、世界のなかのここに、しかしかの状態で生きており、また自らの身体を能動的に動かすことよって世界に変化を生みだす。そのときの自己の行為についての知は内的観点から与えられるもの

である。ところが、私と私のなす行為もまた世界の一部であるがゆえに、生じてくる出来事として行為を描写せざるをえなくなる。そして問題は、行為を外側から見る見方によってすべてが語りつくされると思い込むことから生じるのである。行為を起るものと見る外的な見方は、どのような説であろうと、行なうことの意味を捉えそこなっているように思われる。

註

- (1) T. Nagel, *The View from Nowhere*, 1986, Oxford. の序章および第7章を参照。
- (2) L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922. (奥雅博訳、大修館書店)
- (3) 以下のヴァイトゲンシュタインの意志論に関しては、P. Winch, 'Wittgenstein's Treatment of the Will, in *Ethics and Action*, 1972. RKP. London. (奥、松本訳『倫理と行為』、勁草書房) を参照している。また、ウィンチとは異なる解釈としては、魚津郁夫「行為と原因」(熊本大学文学部論叢第一八号) を参照。
- (4) L. Wittgenstein, *Notebooks 1914-1916*, Basil Blackwell, 1961. (奥雅博訳、大修館書店)
- (5) ウィンチ『倫理と行為』一六三頁〜一六七頁
- (6) L. Wittgenstein, *Blue and Brown Books*, Basil Blackwell, 1958. (大森莊蔵訳、『青色本・茶色本』大修館書店)
- (7) 『探究』第一部六三〇節で、ヴァイトゲンシュタインはこの二つの言語ゲームを対比させている。  
「二つの言語ゲームを考察せよ。  
(a) ある人が他の人に、一定の運動をするよう、あるいは「一定の」身体の構えをするよう、命令を下す(体操教師と生徒)。そしてこの言語ゲームの一つの変形はこうである。生徒が自分自身に命令を下し、それからそれを遂行する、ということ。  
(b) だれかがある種の規則的な出来事——たとえば異なった金属の酸に対する反応——を観察し、それに基づいて一定の場合に生ずるであろう諸反応について予測を行なう。  
これら二つの言語ゲームの間には、明らかな近似があるが、また根本的な差異もある。この双方で、人は言い表された言葉を「予測」と呼ぶことができよう。しかし第一の手法に通じる訓練と、第二の手法のための訓練とを比較してみよ！」



(8) G. E. M. Anscombe, *Intention*, 1957, Basil Blackwell. (菅豊彦訳『インテンション』産業図書)

(9) 『インテンション』二節。

(10) 『インテンション』三節。

(11) ヴイトゲンシュタインにおいても、「観察に基づかない」という表現はすでに準備されている。「たとえば、ある人が朝ベッドから起きるとする。そのさい生起することの全部は、彼が『もう起きる時間かな』と思索し、決心しようとする、そして突然、自分が起き上がっているのに気づく、ということである。』ヴィトゲンシュタインはこのような事例を挙げ、次のようにコメントしている。「まるで他人を観察しているように！自分が起き上がっているのにただ『気づい』たりそれを眺めていたりするのではない。それはまた、反射運動などを眺めるようなことではない。」さらに、ヴィトゲンシュタインは、「『反射運動で』自分の腕が上がるのを観察したり、だれか他人がベッドから起き上がるのをながめているのと、自分が起き上がっていることを気づくことの違いには多くの著しい違いがある」と言い、自分がベッドに起き上がることに気づく場合には、「観察する態度」(an attitude of observing)が存在しない、と言っている。(『茶色本』II, 11)

(昭和六十三年本学大学院博士課程修了・熊本大学非常勤講師)